

# 「台記」の西行、「盛衰記」の西行:西行出家をめぐる言説・再考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/7173">http://hdl.handle.net/2297/7173</a>

# 『台記』の西行、『盛衰記』の西行

——西行出家をめぐる言説・再考——

下西 善二郎

なぜ、西行は出家したか。——くりかえされるこの問いかけのそのつど、西行の〈行為〉は、さばきの庭にひきずりだされることになる。〈行為〉の〈原因〉ないし〈動機〉は、さぐられるべきものとしてある、というわけだ。自白を強要し、物証をさぐり、証言をもとめ、さらには状況証拠をかため、かくて研究史は、「伝記上の謎」たる西行出家の原因、動機についての「真相」をもとめることに熱心であった。

西行出家のはじめにかならず引用されることになる藤原頼長『台記』永治二（一一四二）年三月十五日の記事、また、「恋愛出家説」の淵源に位置させられてきた『源平盛衰記』巻八の記事も、西行の〈事実〉を確認・推定するための資（史）料以上の意味をもつことはほとんどなかったといえるだろう。

しかし、たとえば『台記』という貴族日記の、西行についてあの簡潔な記述のうちに読まれるべきは、簡潔のうちにかた

られるほかなかった頼長における〈物語〉そのものの簡略なすがた、なのではあるまいか。またたとえば『盛衰記』の記事にさぐられていいのは、ありえた西行の恋の、高貴の女人はだれか、という〈事実〉比定の考証作業とはべつに、西行出家をめぐる〈説話〓物語〉形成への動因を『盛衰記』の文体に問うことなのではあるまいか。

〈事実さがし〉の呪縛からときはなたれて、『台記』『盛衰記』における西行出家の關係記事をながめなおしてみたい。西行出家をめぐるこれらふたつのふるい言説についてのちいさな再読のころろみだが、本稿の課題である。

## 一、「心、愁ひなくして」・『台記』の西行

A、西行法師来りて云はく、一品経を行ふに依り、両院以下、

貴所皆下し給ふなり。料紙の美德を嫌はず、ただ自筆を用ゐるべしと。余、不軽を承諾す。又余、年を問ふ。答て曰はく、二十五なりと。(去々年出家。二十三)。抑西行は、もと兵衛慰義清なり。(左衛門大夫康清の子)。重代の勇士なるをもつて法皇に仕ふ。俗時より心を仏道にいれ、家富み、年若く、心、愁ひ無くして、遂に以て遁世す。人、これを嘆美す(＊)。

『台記』永治二(一一四二)年三月十五日。(一)内  
は割注)

西行出家伝のはじめにいつもおかれることになる『台記』のこの記事は、西行出家の年時と年齢を明証するものともふるく確実な史料ではある。しかし、『台記』のこの記事が価値的であるのは、その点においてよりもむしろ、「なぜ」を問わずに西行という出家の現前(げんぜん)にふれえている、からではあるまいか。当時、ありふれた理由以外によって出家したものが、その(原)因・動機(どうき)になんらふれられることなく、すでにそのようにしてある(出家の現前)として「批評」の対象となっている点に、単なる史料以上の意味が存するのではあるまいか。それは、西行という出家の現前が、どうなふう(ふう)に成立しているかをうけとめた、(現場)からの報告となっている。「俗時より心を仏道にいれ」ていたゆえに「遁世」したのだ、と頼長が理解してい

たということであれば、頼長はなにも書かなかつたにひとしいのであるし、「家富み、年若く、心、愁ひ無くして」と言う文言に、西行出家についての頼長の関心の中心があるとすれば、そのおどろきと嘆美の内容が問われねばなるまい。

西行という出家の現前は、この、頼長と西行法師の問答の、きわめて事務的な記述の簡潔のなかにあらわれているのではないか。この簡潔性は、頼長の筆が記述のうちに余分のものをそぎおとした結果ではなく、問答が、じっさいこのように交わされたそのすがたをあらわしている、という種類のものだったのだとおもわれる。

『台記』の記述的特性にふれた松本昭彦の論(＊2)を参照しておきたい。松本論文は、『台記』を記す頼長の意識の「典型的」な例としてつぎのような記事をあげている。

B、癡瘍に巴豆・漆等を付すに、漆木より汁を出だして之を付す。余、諸臣を召して問ひて曰く、「未だ漆の可否を知らざるなり。先づ仲資をして試みしめん」と。諸臣皆曰く、「善し」と。秀才成佐進みて諫めて曰く、「……人を損じて己を安んずるは、君子、諸れをなさず。是君の知るところなり。疾、癒ゆと雖も、悪名必ず代に遺る。豈に善と謂ふべけんや」と。余、即ち漆を取りて之を塗る。

君子曰く、「諫めを以て君の過ちを止む、忠直向つなが

ら備はる。藤丞相、過ちて改むるに憚ることなし。詩にい  
わく、『切するが如く磋するが如し、琢するが如く磨する  
が如し』と。其れ藤丞相の謂ひか」と。

(『台記』康治元(一一四二)年九月九日)

〈記述の簡潔性〉が、かならずしも『台記』の一般的特性で  
はないことがわかる(へ\*3)。また、「曰くく、曰くく」とい  
う記述のしかたが、〈現場の応答〉の再現のころみとなつて  
いることがわかる(へ\*4)。くわえてさらに、それよりも注意  
すべきは、松本論文が、このBのような「典型的」記事例をも  
とに、「日記を執筆することが、出来事を記録した上で、それ  
を自分をも含めて、経書に則って「儒者の視点」から解釈し批  
評していくこと、になっている」と指摘しつつ、『台記』の頼  
長の「批評」意識を見いだしている点である。松本論文は、豊  
富に事例を引用しつつ、「(頼長は)時にその必要のない場合  
でも、ことさらに経書の文言を想起して自他の言動を見てい  
る」と指摘する。これは、基本的には「日並みの記」である  
『台記』の、〈事実〉の記録という側面をこえた貴族日記のべ  
つの一面をうがつものであるだろう。それは、書きての「批評  
意識」が遍満する『台記』という性格的特性を予想させるに  
じゅうぶんである。

Aの記述の簡潔さは、頼長にとって西行という出家の現前が

「批評」の対象とならなかった、ということをしめすのではお  
そらくあるまい。『台記』の「批評」意識は、『台記』の性格  
的特性として、Aのような簡潔な記述のなかにもじつはみちあ  
ふれているのではないのか。むろん、西行の〈行為〉は「経書  
の文言」による「儒者の立場」からの「批評」に乗るものでは  
ない。しかし、Aの記事のみじかい問答の記録ののち、末尾に  
付される「抑西行は、もと兵衛尉義清なり」以下の一文は、  
〈事実〉の記録のみにとどめるのであれば、本来、不必要なも  
のであるだろう。つまり、それは、頼長の「批評意識」のあら  
われなのだとみなしうる。

すると、このAの簡潔な記事とBの記事との歴然とした記述  
上の差は、おそらく〈できごと〉の差にもとづくものなのだと  
おもわれる。ようするに、Aでは、頼長じしんの「批評」のこ  
とばがわずか一行さしはさまれるだけの余地しかない事態が展  
開していたということではないのか。事態そのものが簡潔なの  
であった、ということだ。頼長のふでは、記述を簡潔にすませ  
たのではなく、西行という出家の現前を、寡黙な〈応答の場〉  
の再現のなかにしるしとどめたのである。なぜ、応答が寡黙で  
あったか。西行という出家の現前が、寡黙を身にまもっていた  
からである。つまり、ここにみられる問答の簡潔性は、おそら  
く、西行じしんの簡潔性をしめしている。頼長に「年を問ふ」  
以上の詮索趣味がなく、「西行法師」に自己の〈行為〉につい

ての贅言をついやすところ、つもりがなかったとすれば、かきとめられる記述は、Aのようになるほかなかった、という事情がみえてくる。

それにしても、なぜ、頼長は、とくにも「年を問」うのか。

また、なぜ、「心、愁ひなくして」といった主観的な「批評」をまじえるのか。頼長の「批評」のことばのなかに、この「心、愁ひなくして」という一句がまじるのを、見のがしにできないだろう。西行を目のまえにした頼長の「批評」の中心はここにあり、あるとかがえられるからだ。もちろん、頼長のこのことばは、「去々年」の西行出家の時点をとらえていわれているのではない。「心、愁ひなし」、そういうすがたを身にまとして、二五歳の西行は、いま、頼長のまえにあらわれたのである。対座する西行が発する透明なおいの、頼長の印象の中心として、それはかたられていた。

おそらく、〈遁世〉とは、頼長にとって「心」の事件であることがよく感得されていたということなのであるまいか。それは、「年齢」がかかえもつ「心」の事件であったのだとおもわれる。このとき、頼長（一一二〇～一一五六）、二十三歳。

「家富み、年若く」という西行の、その出家の現前は、二歳ちがいの頼長における〈心の事件〉ともなりえたものなのである。そこに、「年」を問い、「心、愁ひ」を書きしめるす頼長のところをみる。だから、記事の末句に「ひと、これを嘆美するな

り」とある。「嘆美する人」とは、頼長その人のことであつた。「心、愁ひ無くして、遂に以て遁世す」という頼長のこのみじかいことばは、いま目のまえにある西行のすがたをわが〈心の事件〉にかさねてとらえるものであつた。

ちなみに、ほぼおなじころ、藤原通憲の「遁世」にさいしての頼長の反応をみておこう。康治二（一一四三）年八月、天下之才子莫如之」（『台記』康治二年八月四日）と頼長がみとめた通憲の「遁世」を耳にして、頼長は、つぎのようにことばをおくる。

貴下、遁世の由、之を聞く。貴下の為には、現世、資ならず、後世に菩提を得るにもはら益あるも、朝が為には、耻と為す。其の故は、其の才を以て顯官に居らず、已に以て遁世せむとす。才、世に余り、世、之を尊ばず。是、天の我国を亡す也。（『台記』康治二（一一四三）年八月五日）

その数日後、通憲と対座しての頼長のことばは、つぎのとおりである。

夜に入りて通憲に逢ひ、相共に哭す。通憲をして笙を吹かしむ。帰らむとして余に命じて云く、臣、運の拙きを以て一職を帯せず、已に以て遁世せむとす。人、定めて、才の高き

を以て、天、之を亡すと以為へり。いよいよ学を廢す。願はくは殿下、廢することなかれ、と。余曰く、唯、敢へて命を忘れず、と。涙下ること、數行。

『台記』康治一（一一四三）年八月十一日

「相共に哭」しているのは、「天下の学才」が世にいられないことに象徴的な、学道のおとろえにたいする悲憤のゆえであり、「涙下ること」も「遁世」というできごとにたいしてのものではない。このとき、通憲（一一〇六—一一五九）、三八歳。通憲の「遁世」は、「年齢」がかかえもつ「心」の事件として頼長にせまるものではなかったと知られる。通憲をおそっているこの事態に対する頼長の「涙」は、かつて対座した西行にむけられた頼長の心中の「嘆美」の内容にことなる種類のものであったといわねばならない。

『台記』の西行出家記事にうかがい知らうべきが以上のようなものであるとすれば、西行出家についてのもっともふるい証言の尊重されるべき事情もそこに存する。記事は、頼長と西行の〈応答の場〉をおそらくそのまま過不足なく再現するようなものであった。同時に、頼長のところに〈心の事件〉としての「遁世」という事態をつけしらせる現場の記録であった。それは、西行という出家の現前が所有する簡潔さが〈応答の場〉にはたらいた磁力そのものの、寡黙な記録であったといつてよい。

## 二、「空になるころ」・出家時の西行歌

### 1、「そらになるころ」

歌が〈行為〉を直接的に説明するわけでもなく、〈行為〉のところが歌によってつねに外在化されるときまったものでもないのだが、歌が発散するにおいを、〈ころ〉のうごきの間接的な証拠とすることはできるだろう。出家当時の西行のころのうごきは、かれの歌々によって間接的にするほかない。

たとえば、西行出家伝のはじめにこれまたかならず引用され、「西行伝を叙する時、一つの指標となるような作品」〈\*5〉とされるつぎの歌は、出家という事態にむきあった西行の、どのような〈決意〉をかたっているだろうか。

世にあらじと思ひ立ちけるころ、東山にて、人々、  
寄霞述懐といふことをよめる

A、空になる心は春の霞にて世にあらじとも思ひ立つかな  
（『山家集』七三三）

詞書の「世にあらじと思ひ立つ」ということばが、歌のなか  
にそのまま使用されるようなこの歌は、歌の心がすでにその詞  
書にしめされているようなもので、この歌では、「空」「霞」

「立つ」という縁語仕立てによる包圍をみればそれでじゅうぶんであるのかもしれない。しかし、「空になる心」とはなんであるかという、作り主のへこころをのぞきたくなるような措辞をうちすててはおけない歌となっている。

「こころ・そらになる」といううたいかたは古今集以来すくなくない。なかで、「こころ・そらになる」という歌句が西行A歌のようにへ人事へにむすぶ用例をもとめれば、つぎのようなものがあげられる。

別れ行く道の雲居になりゆけばとまる心も空にこそなれ

(後撰集・離別 一三二五)

春霞たつあかつきをみるからに心ぞ空になりぬべらなる

(拾遺集・別 三〇一)

白雲のかかる山路をふみみてぞいと心は空になりける

(金葉集・恋上 三六六)

みられるように、「虚脱した感情」をうたうことがしばしばである。「そら(空)とは、「何にも属さず、何ものもうちに含まない部分の意。転じて、虚脱した感情」と釈されることばであった(『岩波古語辞典』)。ただ、上掲の歌で注意しておきたいのは、「こころ・そらになる」ことの、それぞれにその原因となるものがはっきりうたわれている点だ。つきにかかけ

るような歌は、「心・そらになす」原因が「雲居の桜」にあらうことをうたって明確である。

春ことに心を空になすものは雲のみにゆる桜なりけり

(詞花集 春 二五)

つまるところ、こころの内部の充実がなにごと(なにもの)かによつてかきませられ、また、こころのなかみがなにごと(なにもの)かに吸いとられて空洞になった不安定な状態、それを、「空」にかかわる縁語をかならずひき寄せながらうたうところに、「こころ・そらになる」のうたいぶりの特徴はあるといえるだろう。

西行のA歌がきわだつのは、「空」の縁語仕立てによりながら(≡伝統的なうたいぶりによりそいながら)、しかし、なもの(なにごと)によつて「こころ」のなかみがすいとられていのか、はっきりうたわれていない点にある。西行は、じつは、はっきりしないようにうたっているのではあるまいか。西行は、はっきりしないものによつてすでに「空」になっている心、「そのことをこそうたおうとしているのではないのかへ\*6」。

「空になる心」というかたちのごとくはつづけば、西行以前に例をみいだせない、西行に独自のものだへ\*7。それは、

「うわの空となつてゐる心」(※8)にちがいない。だが、それは、放心や自失の単純な態をうたつてゐるのではあるまい。むしろもつと積極的に、こころが空無にみたまはれてゐること、こころの空洞がはつきり自覚されてゐることをうたつてゐると理解すべきではないのか。「空になる心」というすでにそのようであるこころが、それとしてうたはれてゐるからだ。西行のこの歌で、こころの空洞が、そのまま際限をもたない空漠とした「空」としてうたはれてゐる点をおとすことができないのもそのためである。「こころ」が「空」になり、「空」が「こころ」になる、と印象させるところに、西行の「空になる心」ということばのつづけがらの眼目はあるだろう。

しかも、「心は春の霞にて」というのだから、「こころ」がそのまま「空」に立つ「春の霞」だということになる。これは、むろん譬喩である。しかし、「こころ」に充滿する空(うつけ)が、そのまま「春の霞」であるという措辞は、「霞」という実体がへうつけであるというところをうながすだろう。すると、そのような「霞」が「立つ」ように、「心」が「思ひ立つ」とは、「世にあらじと思ひ立つ」こころの不確かさがうたはれてゐることを意味するのではあるまいか。なぜなら、「霞」はみづからが意志してみづからの立ちどを決定するだろうか。「霞」はなにかを決意して「立つ」ことをするだろうか。「霞」はただ、ただいま現在のこの場所に、おのづからに茫漠

として「立つ」のである(※9)。

これが、「霞」におわされた「立つ」ことの意味だとすれば、そこにかさねてうたはれる「空になる心」が、なにかをへ決意しうるたしかなものとしてうけとめられてゐるはずがない。「世にあらじ」と決意しているのが、「うつけたこころの空」に充滿する「霞」であつてみれば、ほんとうは、なにも決意なぞしてはいないというべきなのである。

「寄霞」ということの意味が、そこにもとめられる。つまるところ、出家にさいしての、じしんにおいてすらの「こころ」の不分明さが、「空になる心に立つ霞」に「寄」せてうたはれたのである。出家の〈原因〉や〈決意〉を、それとしてうたうことは、かれじしんにおいてできなかったのだ、というすがたがみえる。

## 2、「かずならぬこころ」

〈原因〉は西行自身においてもあきらかではなく、だから、西行は、〈原因〉をうたうかわりに、「世を厭ふ」という現在のこころの事態をそのままにうたうほかなかつたと思ひしことが、上掲の歌とおなじときによまれたとかんがえられてゐる、つぎのような歌のなかにもあらはれてゐる。

同じ心を



B、世をいとふ名をだにもさはとどめおきて数ならぬ身の

思ひ出にせむ  
〔『山家集』七二四〕

「同じ心を」とは、ならんで前歌に配列される『山家集』七二三歌の詞書の「世にあらじと思ひ立ちける」心をさすへ\*10。出家に際してのこのB歌での問題は、「数ならぬ身」といううたいぶりにどのような〈決意〉がうたわれることになっただか、であろう。

出家にあたって、出家後の自分のすがたを「世をいとふ名」のなかに「身の思ひ出」として封じこめようとうたうこの歌において、もし〈決意〉らしきものがうたわれているとすれば、それは、「数ならぬ身」という自己規定がもった「数ならぬ心」においておこなわれた〈決意〉にはぼ等身大だったというべきではあるまいか。「数ならぬ身」とうたうとき、西行には、「数ならぬ心」を所有するものとしての自己意識の規定が存するようにみうけられるからである。「数ならぬ身」は「数ならぬ心」をもつほかない、ということだ。そのことが、つぎのような歌からしられる。

数ならぬ心の咎になしはてじ知らせてこそは身をも恨みめ

〔『山家集』中・恋 六五三〕

なにとこは数まへられぬ身のほどに人を恨むる心なりけむ

〔『山家集』中・恋 六七三〕

数ならぬ身をも心のもりがほにうかれてはまたかへり来にけり  
〔『上人集』六七二〕

これらを見れば、「数ならぬ身」には「数ならぬ心」が相応するほかないという自己意識の規定があらわである。そうでなければ、「数ならぬ心」という直接的なうたいかたはありえない。この「数ならぬ心」ということばつづけもまた、西行に独自の用法なのであったへ\*11。とすれば、「数ならぬ心」がもちうる〈決意〉とは、もとより大仰にかまえられ、他にたいしてのあからさまな決意表明といったものからはとおい告白であったといわねばならない。

かくて、西行のB歌は、明確な〈決意〉にうながされて出離するでもないわが身の、そのゆえに、せめては、「世をいとふ」ものとしての「名」を「とどめ置」こうというのであって、さきのA歌におなじく、〈原因〉も〈決意〉もそれとしてあきらかにはうたえないのだ、と告知するものであるだろう。B歌は、「数ならぬわが身」と「数ならぬわが心」を、〈決意〉のよそに、いつくしんでいるのである。「数ならぬ心」がもった〈決意〉とは、その意味において、「空になる心」がもった〈決意〉とおなじほどのものであった。

### 3、「C」のおく

〈行為〉が執行されてしまえば、かたられたことばは、ひとをなにごとか納得させ、ついでにみづからをもなにごとか納得させようとする弁明の役割を負ってしまうものだ。〈決意〉と思しきもの輪郭が、おぼろなかたちをとって目前にたちあらわれていると見えながら、しかし〈行為〉についての納得は、けつして核心にふれることがない。出家の際に詠まれたというつぎのような歌も、おなじような事情をつたえるものではあるまいか。

世をのがれける折り、ゆかりありける人のもとへ  
言ひおくりける

C、世の中をそむきはてぬといひおかむ思ひ知るべき人はな  
くとも (『山家集』七二〇)

「ゆかり」ある「人」に、西行は、なにか大事なことをいいつたえようとしているだろうか。また、なぜ、「世をのがれける折り」の感懐をこのようにうたわねばならなかったろうか。

「世の中をそむきはてぬ」ということは、しずかに、ひと知れず、すがたをかくしさえすればそれではたされることである。にもかかわらず、「いひおかむ」とは、この歌が、〈挨拶〉の歌であることを示唆している。むろん、「思ひ知るべき人」へ

わが覚悟のほどをいいとどけたり、わが心中にみたまされてある「空洞」をおなじ程度に「思ひ知」ってほしい、などとうたっているわけではない。「いひおかむ」とは、とりあえずそう言ったままで、決意や覚悟のたしかさをのべるものではあるまい。ひらたくいえば、〈行為〉はいつともしれず執行されました、ただそのことを言っておくことにいたしましょう、とそのくらの呼吸でうたわれているとみるべきなのである。

「ゆかり」ある「人」が、ただひとり、「思ひ知るべき人」として遇されている点に、このC歌の〈挨拶歌〉としての本旨はあるだろう。しかし、それは、「思ひ知る」べき「人」が特定のだれかれでなければ成立しない、というものではない。むしろ、だれにたいしても成立するよううたいぶりであろうかと、そこにこそ、〈挨拶歌〉としてのこの歌の本旨は存する。しかも、この歌をおくられた「ゆかりある人」は、へわたくし個人〉にあてられた私信として理解するのである。それが、ここにいう〈挨拶歌〉のすがたである\*12。

西行に、「世をのがれける折り」のことをうたう必要があったとすれば、〈行為〉の説明しがたい領分を、つたええないものとして他人に了解されるようにうたうためではなかったか。この歌を「言ひおく」られた「ゆかり」ある「人」は、西行の〈挨拶〉の真意をはかりえず、「心の奥」をとらえようと努力したかもしれない。しかし、「心の奥」はとらええず、ただ、

〈行爲〉が執行されたというその事態だけを了解することになったはずである。あるいは、〈行爲〉の執行にともなうにほどか解可能な部分についての了解のみを、ここにおもひえがくことができただけであったはずである。

もとより西行においては、自身の「心の奥」についての他人の了解が期待されているのではなかったし、ひとの「心の奥」がはっきりつかみうるものとしてあるとは考えられてもいなかった。つぎのような歌をみよう。

東路やあひの中山ほど狭み心の奥のみえはこそあらめ

（『山家集・中・恋・六九五』）

あいだにそばだつ〈中山〉がなければ、ひとの「心の奥」がみえるはずなのだが、と希望的なことをうたっているのではない〈\*13〉。ひとの「心の奥」は、もとより「みえ」ないものとしてうたわれている。西行歌に「心の奥」は、ほかに、

山深みつゑにすがりてゐる人の心の奥のはつかしきかな

（『山家集』一三三八）

あわれなる心の奥をとめゆけば月ぞ思ひのねにはなりける

（『聞書集』八八）

がある。二首とも、自身の「心の奥」にむけての歌となってお

り〈\*14〉、自身の「心の奥」はたずねあてられる場所のよううたわれている（心の奥をとめゆけば）。しかし、これらの「心の奥」は、じつのところは「心の見え難さ・奥深さを、到達し難い山奥のイメージに重ねて具象化させている」（\*15）というものであって、西行の自身の「こころ」においても、「心の奥」という場所が限定されたたしかな場所として確信されているわけではないのである。

以上のようながめきて、こころであらためて『台記』の記事をおもいかえせば、西行が「心、愁ひな」き顔つきをしていたという頼長の印象は、ゆえなきことではなかったと知られる。西行は、自身の「こころ」についての不確かさをよく知っていたのであり、不確かさについての確信は、また安定的な相貌をまとして他に対しうるものでもあるからである。頼長の寡黙な記述は、西行という出家の現前を〈行爲〉としてそのままにうけとめるなか、西行の不確かに安定的な「こころ」を、一瞬の直観の総体のなかに射止めるものであった。それは、西行についての〈物語〉を一瞬のうち「こころ」のなかに構成するできごとであったというべきではないか。現代の研究者が、出家前後の西行歌に、「出家に心を寄せる作者の浪漫的な思い」（\*16）や「諦めきれぬ嘆息」（\*17）をききとり、また、「現在の生き方に満足しなかった」西行の、「自身の運命の変革を試みる」「浪漫的精神」をよみとる〈\*18〉こととおなじよ

うな〈物語〉を、頼長もまた、寡黙な〈応答の現場〉の記録のなかにおりあげていたのである。

### 三、「中比のすきものにて」・『盛衰記』の西行

ありえた西行の恋の、高貴の女人はだれか、という問いが、ある〈事実〉的な結論を得て落着するならば、『盛衰記』の西行記事は、〈事実〉比定の考証作業へかかる端緒を提供したにすぎないへ\*19)。もっとちがうアプローチはないだろうか。たとえば、『盛衰記』の「悲恋遁世説話」にさきだつ西行関係記事は、どのような位置をしめ、どのようなかたられかたをしているのか。それは、西行の「悲恋出家」という〈説話〉物語の形成に関与してはいないか。『盛衰記』というキテストしたいが、もっとも検討の対象となっていないのだとおもわれる。『盛衰記』巻八—六「讃岐院事」は、つぎのように西行関係記事をのせる。

A、新院讃州配流の後は讃岐の院と申しけるを、(安元三年) 七月二十九日に御追号あつて崇徳院とぞ申しける。 去る保元元年(一一五六)七月に当国に移され御座しまして、始めは直島に渡らせ給ひけるが……(中略)……その後長寛二年(一一六四)の秋八月二十四日、御年

四十六にて、志度といふところにて終に隠れさせ給ひにけり。……鳥羽院の北面に佐藤兵衛の尉憲清と云ひし者、道心を発し、出家入道して西行法師と云ひけるが、大法房円位と改名して、①去ぬる仁安二年(一一六七)の冬の頃、諸国修行しけるが、中比のすき者にて、②東は壺の石歩、③夷が島、④西は金の御崎、⑤松浦の沖、名所旧跡の歌枕を歩み、見ぬ所はなかりけり、⑥不破の関屋に留まりては月には雲のふはと云ひ、⑦武蔵野を過ぐるとは柏木の葉守の神を恨みけり、⑧実方中將の墓にては一叢薄を悲しみ、⑨白河の関にかかりては関屋の柱に筆を止む。四国の方の修行を思ひ立ちけるときは、⑩江口の妙に宿を借り、仮の宿と読みしかば、心とむなと返しつゝ、一夜の宿をぞ借りにける、⑪讃岐の国へ入りて、松山の津といふ所に着きぬ。ここは、新院流されて、わたらせ給ひける所ぞかしと思ひ出し……

⑫松山の波に流れてこし舟のやがてむなく成りにけるかな

⑬よしや君昔の玉の床とてもかからむ後は何にかはせむ

⑭久に経て我が後の世を問へよ待つ跡徳ぶべき人も無き身ぞ

⑮ここをまた我が住みうくてうかれなば松は一人にな

らむとやする

書き注してぞ出にける、是にや怨霊も慰み給ひけむとお  
ばつかなし。

(引用は、通俗日本全史本『源平盛衰記』による)

この記述において西行の旅は、「名所旧跡の歌枕を歩み、見  
ぬ所はなかりけり」と位置づけられ、初度陸奥行も、再度陸奥  
行も、また、西国・四国への旅も、ひとくくりに述べられてい  
る。それがいつおこなわれたのか、〈事実〉についてまるで無  
頓着である。

Aについて、表現の典拠となったと判断されるものを略記す  
れば、以下のごとくになる(紙幅の都合上、典拠名のみをあげ  
る)。

- ①『山家集』一〇九五・詞書(上人集・三八二、心中集・  
二八八)、②『山家集』一〇二(上人集・七二三)、『西行  
物語』、③『山家集』一〇〇九、『西行物語』、④『撰集抄』  
巻五・二三、⑤『閩書集』一一九、⑥未詳、⑦未詳(ただし、  
「武蔵野」は、『山家集』二九六、『撰集抄』巻六・十二、  
『西行物語』、『発心集』巻六・十二。「葉守の神」は、後  
撰集・一一八三、金葉集(二七)、⑧『山家集』八〇〇、⑨  
『山家集』一二二六、⑩『山家集』七五二、⑪『山家集』一  
三三三、⑫『山家集』一三五三、⑬『山家集』一三五五、

⑭『山家集』一三五八、⑮『山家集』一三五九  
以上を整理すれば、次の通りである。

(イ) 西行歌によれば書きうるもの。

①②③⑤⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮

(ロ) 西行歌以外の文献によるもの。

④⑥⑦

Aの記事は、おおく『山家集』所掲の西行歌を資料とし、そ  
の詞書、歌の一部をとりきたって記事をなりたたせていること  
が目瞭然である。ただし、「歴史的な正しい時間」が無視さ  
れているのもちろんのこと、西行歌をそのまま引用するばあ  
いにおいても、その詞書は無視され、歌意すらもがねじまげら  
れて、象嵌される(例、⑭⑮)。しかも、西行歌によるのみで  
は書けないものについては、西行関係の周辺資料がもちいられ  
ることになる(④⑥⑦)へ\*20。後世に伝承的西行像を提供し  
た『撰集抄』『西行物語』等の文献すらをも利用する、という  
のが、『盛衰記』の記事のありかたの具体的なのである。記事の  
形成は、いたって自在であるといわねばならない。西行歌の文  
言を文中にとかしこみ、美文的にかまえられるその記述は、西  
行歌にもとづく表現であるそのことにおいて西行の行跡に密着  
しようとするものでありながら、かえって、ことがらの事実性  
からはとおさかる書記となっている。

この『盛衰記』の書記態度は、直後にかたられる「西行悲恋

遁世説話」が出典をもたない独自記事であることとおそらく無関係ではない。むしろ、記事の自在さの獲得が、〈説話Ⅱ物語〉創造のひとつの源泉だったといふべきなのではあるまいか。「西行悲恋遁世説話」はつぎのようにかたられている。

B、さても西行発心の起りを尋ねれば、源は、恋ゆゑとぞ承る。申すも畏れ有る上臆女房を思ひ懸けまゐらせたりけるを、「阿漕ぎの浦ぞ」と云ふ仰せを蒙つて思ひきり、官位は春の夜見果てぬ夢と思ひ成り、榮榮は秋の夜の月西へと准へて、有為の世の契りを通れつつ、無為の道にぞ入りける。(後略)。

『盛衰記』は、Aにみるように、もとより記事の事実性・信憑性ということをまず第一に問題としてはいなかったろうし、じつさい、事実考証の態度でことがらをかたることを目的としてはいない。おそらくそれは、『盛衰記』の書記の基本にかかわるものなのだといいてよく、『盛衰記』の書記の基本がそこにあるだろうことは、つぎのような事情からも可能な推察の範囲内にある。

『平家物語』の一異本としての『源平盛衰記』は、「本伝」(Ⅱ年代史的記述)に対する、「傍系説話」(※21)といふふくらみ部分の多大な所有という特徴において、『盛衰記』固

有の位置を獲得している。その膨大なふくらみ部分および源氏寄りの記事部分をそいでしまえば、「あらずじとしては、『平家物語』に変わりはない」(※22)ことになる。

Aにかかげた「讃岐の院の事」は、いちおうは、「本伝」たる年代史的記述のわくのなかにおさまる。ただし、「崇徳院追號」がなされた、という記事のみが「本伝」の時間のながれ(安元三年七月)にのるものであり、しかも、その記事量は、わずか一行あまりにすぎない。そうして、西行にかかわる記事Aは、その「本伝」にいわば輪つなぎされたものである。そこにさらに輪つなぎされるBの「西行悲恋遁世説話」は、もはや「本伝」に直接関与的な位置にはないといわねばならない。

『盛衰記』という書記の特徴が、「本伝」をかたりつつ、意図的に、目下の叙述事項に関連するたとえば先例としての和漢故事に言及し、さらに、その引用された和漢故事に関連的な記事を加する、ということろにあることをすれば、つぎつぎと〈説話Ⅱ物語〉が輪つなぎに結合されてゆくことをかれの文体的特徴とすることができる。この輪つなぎによる『盛衰記』の文体は、和漢故事の煩瑣な引照というペダンティックな姿勢を基本とし、話材と話題の拡散をいとわない。いわば〈饒舌の文体〉が、『盛衰記』の書記を特徴づけるのである。それは、「一定方向に流れる時間」を「途中で懸垂」させ、「その中で確認作業を行う」(※23)という覚一本『平家物語』の方法

をさらにおおはばにふみこしたものであったが、しかし、そのゆえにかえて自身の文体を〈饒舌〉にしてしまった『盛衰記』固有の「確認作業」なのであった。

それは、「表現の質の問題」として、「ヨミのテキスト」にかかわる問題であった。兵藤裕己は、「部分を敷衍して注釈を加える姿勢」という、『大平記』に共通する『盛衰記』の性格が、「注釈・講釈」を「ヨム」こととしてとらえた「中世的なヨミ」の世界のなかに位置づけられるものであったことをのべているへ\*24)。すると、『盛衰記』の〈饒舌の文体〉とは、「ヨミのテキスト」がみずからの方法として採用した書記言語であったといわねばならない。〈饒舌の文体〉が、「ヨミ」注釈・講釈」をとおして自己増殖する、ということであり、自己増殖をいとわない結果が〈饒舌の文体〉であった、ということだ。もちろん、この自己増殖は、「本伝」からの距離が確実に計算されての鎖状結合なのではない。鎖状にリンクされた〈説話」物語〉は、「本伝」からはいちじるしく距離をもつばあいがありへ\*25)、全体として、「本伝」とのあいだに内容的関連性における濃淡をもつことになっている。『盛衰記』の、「時間を懸垂」させたうえでの「確認作業」は、「ヨミのテキスト」が許容した拡散性・遠心性のなかに、語りの「平家」とはべつの方向をはらんでなされていたといえるだろう。

このような『盛衰記』の文体のなかに、西行関係記事も存す

る。

Aの記事は、西行を崇徳院という「本伝」に関係づけてはいるものの、しかし、「懸垂」させられた時間のなかに、「道心を発して、出家入道し」た西行の行跡をおもに『山家集』によって再構成した「注釈・講釈」＝「確認作業」にすぎない。「中比のすきものにて」という像が、ここでの「注釈」における西行の位置である。

だが、西行の出家が、あらためてBのように「さても西行発心の起こりを尋ねれば」と書きだされていることは、すこしく注意されてよいようにおもわれる。それは、ことがらの起源にかえての「確認作業」とみなしうるからだ。「そもそもく」とは、「むかし、く」というかたりくちを冒頭に使用しつつ、異朝・本朝の準拠・先例説話を本文にまきこんでしまう『盛衰記』の書記態度に、それは、密接していよう。そこに、ことがらの起源に遡行して「起こり」から「注釈」しようとする『盛衰記』の「態度を認めうるとすれば、それは、『山家集』による「注釈」をおえた『盛衰記』の言語が、「中比のすきもの」西行を、〈物語〉の起源にかえて「講釈」しなおそうとしたことを意味している。

その〈物語〉とは、別稿でのべたようにへ\*26)、〈高貴の女人への恋」神の妻への恋〉という起源的な深層の物語類型をひそめてかたられる物語であった。すなわち、「申すも畏れあ

る上臈女房」への恋というかたちでかたられるその〈説話〉物語は、すでに〈伝説の人としての西行〉が、かの業平のおおい後裔として、いわゆる「色好み」の属性をすらも賦与されて（それが、〈高貴の女人への恋〉としてかたられたのだ）、業平同様、美質の所有者としてかたりなおされるものであったのだ。それは、「中比のすきもの」西行が、じつのところは「歌聖西行」にほかならないとする認識においてかたられたものかたりののである。「西行悲恋遁世説話」という〈説話〉物語の生成は、「歌聖西行」の遇しかたの中世的ならわれなのであった。『盛衰記』の〈饒舌の文体〉があやつる書記特性は、そのような物語をも矛盾なく自己の文体にとりこみうるものだったのである。

〈\*1〉 引用は、増補史料大成 23 「台記・一」臨川書店による。以下同じ。

〈\*2〉 松本昭彦「貴族日記の中の自画像」『國語國文』62巻 10号、平成5・10。

〈\*3〉 「台記」の記述は、繁簡おびたしいものがある。「七日庚子、雨降、不出行」（保延二年十二月七日）という一行もあれば、三百行以上にわたる長文も存する（同年同月九日）。「頼長の日記」台記は、彼が強烈な個性と深い学殖の持主であったかため、すこぶる生彩に富んでいるし、表現また精確であるが、「但し、主観的な記述や解釈も少からず入り混っている」（増補・史料大成「台記 一」解説）と評されている。

〈\*4〉 「台記」は、しばしば、「仰云」「談云」「談語云」「申云」「米云」などもちいてことごとくを記述する。その語法に、そのようにしてする〈現場の記録〉性へのかたむきもあらわれているのだとおもわれる。

〈\*5〉 久保田淳「山家集入門」 p.107 有斐閣。

〈\*6〉 「浄土を願う気持に心も空になる」（後藤重郎・新潮日本古典集成「山家集」頭注）、また「現実の身体は地上に「俗」のまま繋がれているのに、「心」だけは糸を断ち切った気球のように、別の空間へ、仏道の世界へ上昇してゆくのを、この言葉の奥に感じとっているのではないか」（高橋英夫「西行」p.57、岩波書店）という理解がある。にわかにしたがえない。

〈\*7〉 「空になる人の心」は泉式部に用例がある。「空になる人の心」にさがにのいかに今日またかくて暮らさむ」・後拾遺・九二六。

〈\*8〉 久保田淳「西行の世界」p.78、日本放送出版協会。

〈\*9〉 この歌の「霞」に、「あたかも春霞のように高揚した時」（久保田淳「新古今歌人の研究」p.42、東大出版会）という理解は困難なのではあるまいか。西行が「霞」をうたうばあい、立春の霞、春のしる



しとしての籠、煙にまがう籠、野辺の籠、海辺の籠、吉野の籠、などを主題とする、おおかたは伝統的なうたいぶりをしめす。なかに「一首たちかはる春を知れとも見せ顔に年をへだつる籠なりけり」(『山家集』四、「心中集」一五九、「御養簿」十一番左)がある。たんに擬人法としてかたづけしてしまわなければ、「意志」する籠がうたわれて特徴的である。しかしこのようなたいぶりが、西行の「籠」歌の基本的性格をしめすのではない。「空になる心」に立つ「籠」も特に「意志」する籠とはかんがえないでよいだろう。『西行物語絵巻・詞書』(久保家本)に「出家事をおもひさだめたりしに、おりふしそらかすみ、こころばそかりしに」(久保田淳編『西行全集』による)という理解がこの歌のなかみを存外ただしいあてているのではあるまいか。

〈\*10〉後藤重郎・新潮日本古典集成「山家集」七二四歌・頭注。

〈\*11〉「数ならぬ身」を歌句にもつ歌はおおいが、一首が「数ならぬ身」と「心」を同時に詠みこむものは、俊類歌にもない。西行歌をのぞいてつぎの例をひろえる。○数ならぬ身は心だになからむ思ひしらずはうらみさるべく(拾遺集・恋五・九八四)、○おもひやれ身の数ならぬ嘆きをも忘るほどの恋の心を(久安百首・九五二)、○数ならぬ身にも心のあり顔にひとりも月をながめつるかな(千載集・恋三・八一九)。これらによれば、「数ならぬ身」には「数ならぬ心」が相応するという思考は西行独自のものではないことになる。が、『山家集』六八三歌のごとくに「数ならぬ心」とひといきによみおわせてしまふ例はみあたらない。そのことのために、西行の独自の詠歌姿勢はみてとるべきではあるまいか。

〈\*12〉この歌を「挨拶」歌とするについてはすでに風巻景次郎、窪田章一郎に言がある。風巻は、「私の思うには、彼の恋の秘密の、はじめは中に立ち、後には中を割くの立ち廻つた女房、そうした関係者に対する。これは挨拶である。恋の相手のその人に、じかには出せる身の上

ではない。」(『全集』第八巻P.98、桜楓社)と述べ、窪田は、「思ひ知るべき人は」ない、自分だけの思いではあるけれど、あなたは汲んで、理解してくれるだろう、また理解もしてほしい、というような余情が、詞書の「ゆかりある人」への挨拶になっていると考えられる。」とのべている(『西行の研究』P.119、東京堂)。風巻が西行の「恋」の美人生的側面からせまくこの歌を解しているに對し、窪田は、内容をおしひろげて理解している、という相違がみられる。とくに窪田の、「ゆかりありける人」はどういう人か知らないけれども、鳥羽院に暇乞いをしたのとはちがって、もっと私的関係に、こういう人がいたのである。この歌も、その人だけを対象としたというよりは、もうすこし広い立場で歌われている。」(『西行の研究』P.118)という理解が支持できる。

〈\*13〉この歌も、境界地名としての〈中山〉、および〈中山〉という語の喩・象徴という側面からよみとかれるべきである。拙稿「西行と〈中山〉」(『日本文学』39巻12号、平成2・12)を参照願えればさいわいである。

〈\*14〉二三八歌については、「なぜここに配されているか」という点から「山」は和歌の道、「杖」は俊成、「入る人」は西行」という解の可能性もめめされている(後藤重郎・新潮古典集成「山家集」解説P.458)。

〈\*15〉寺島恒世「歌語」〈奥〉考(『國語國文』昭和62・10)。寺島論文は、「心の奥」という用法の、西行的創始についてふれ、また、歌語としての「奥」の消長をたどるなか、「そもそも奥」は、方向でも場所でもない不可視、さらには不可知な、限定不能の「どこか」を指す、「いすこともわからない、しかしどこか究極の一点を指向する」と論じている。なお、「汲みて知らるる」ものは「心の底」・「心のうち」であった。「汲みて知る人のあらなむおのづからほりかねの底の心を」(『山家集』六九〇)。「待ちつけてうれしからむ七夕の心のう

ちぞ空にしらるる」(『山家集』二六二)など。ただし、「心の底」も、「掘りかね」るものではあったようだが(六九〇番)。

〈\*16〉窪田章一郎『西行の研究』P.126、東京堂。

〈\*17〉風巻景次郎『全集』第8巻P.98、桜楓社。

〈\*18〉久保田淳『新古今歌人の研究』P.41、東大出版会。

〈\*19〉この「事実」比定の認証作業は、くるべきところまできているのだとおもう。もっともあたらしいところでは、五味文彦『藤原定家の時代』に、従来の美福門院説や有力視された「侍賢門院璋子」説を否定し、「上西門院」説の可能性がかかげられている(P.120〜22、岩波書店)。

〈\*20〉⑥は未詳ながら、現存西行歌に典拠を見いだせない。

〈\*21〉坂口玄章『平家物語の説話的考察』では、「主要説話」と「従属説話」(P.73、昭森社)、佐々木八郎『平家物語の達成』では、「本系的叙述」と「関連的叙述」(P.182、明治書院)、とよびわけられている。

〈\*22〉『岩波日本古典文学大辞典』「源平盛衰記」の項。

〈\*23〉松尾葦江『寛一本平家物語における方法としての説話——平家物語の時間・その三』、『平家物語論究』1985、明治書院。

〈\*24〉兵藤裕己『語り物序説』P.162、有精堂。

〈\*25〉たとえば、巻七の8〜巻八の2、のはあい。「歌の功德」という主題的連関によって、本朝・異朝の先例故事が列挙的に結合されている。

〈\*26〉拙稿「西行悲恋遁世説話の基層」(『日本文学』42巻3号、平成5・3)をご参照ねがえらばさいわいである。

(昭和四十九年卒業 上越教育大学言語系助教授)